

## 文部科学大臣賞

『手をだきしめる』

静岡県袋井市立袋井北小学校 五年 女子 鈴木 絢乃

四月下旬、四時間目の体育が終わり一年生の教室の前を通りました。その日は初めての給食の日で、一年生のわくわく気分が私たちにも伝わり、楽しい空気の中で準備が始まっていた。

周りを見わたすと、はなれた場所の女の子と目が合いました。

私はその子に笑顔で近づき、話かけました。

「私は鈴木絢乃です。お名前は？」

女の子はモジモジしながら名前を言いました。はつきり聞こえませんでした。が、外国人であることは姿と名前で分かりました。

「給食楽しみだね。」

私が言うと、うなずきながらとびきりの笑顔を見せてくれました。

友達が体育館に忘れ物したので一緒に取りに行き、先ほどのろっ下を通った時、先ほどの女の子が、教室とろっ下の間で泣いていました。私はその子のところへ行き、わけを聞きました。女の子はクシャクシャのハンカチでなみだをふきながら、

「こんなにいいしそんな食事ありがとう。父さん母さん妹に食べさせたい。お姉さん持って帰ってもいい。」

周りでは、あれきらい、これきらい、残していい、などの声が聞こえているのに、その子は食べられることに感しゃし、さらに、家族にその食事を分けようと考えていたのです。その子が、どのような生活を送ってきたのかは分かりませんが、感しゃする心と、人を思いやる心を持った素晴らしい子だと感じるとともに、日本人が忘れかけている食に対する感しゃの心をこの子から学びました。

そして、以前クラスでおきた出来事を思い出しました。

給食の準備中、友達がふざけてご飯粒を投げ合っていました。がやがて給食を投げ合うけんかになっていました。先生がけんかを止めて注意すると友達は、

「こんな給食より家に帰ればなんでもある。」

その言葉に、給食への思いや反省すら無く、見ていた私が恥ずかしかったことを思い出しました。そして、その友達や一年生の女の子との関わりにより、給食のことを真けんに考えるきっかけになりました。

日本は食べ物に困る人はほとんどいません。そのため、食べられることがあたり前と感じ、感しゃすることがうすれていると感じます。

私は思います。生きる中で最も大切な食。目の前の食べ物と、それに関わった全ての人に感しゃすること。そして多くのことに感しゃできた私の心をだきしめる思いで、手を合わせることに「いただきます」の意味だ。

今は給食のとき、あの女の子を思い出し、「いただきます、ごちそう様でした」と静かに手を合わせます。感しゃできた自分をだきしめるように。